話しことばの科学

コミュニケーションの理論

国際基督教大学助教授
斎藤美津子

サイマル出版会

話しことばの科学

コミュニケーションの理論

斎藤美津子

サイマル出版会

話しことばの科学　　斎藤美津子著

© Mitsuko Saito
The Simul Press, Inc. 無断転載を禁ず
Printed in Japan

(発行所) 株式会社　サイマル出版会

発行人／村松増美　編集人／田村勝夫
東京都港区赤坂1-11-45興和第3ビル(〒107)
電話 (03)582-4221(代)／振替・東京52090番
印刷・製本　凸版印刷株式会社

1972年普及版(1971年初版)　〈0381－070021－2703〉

人生行路に不可欠の道案内書

笠　信太郎

「ことばの魔術」ということがある。ちょっとした言葉づかいで、相手に誤解をさせたり、偏見をもたせたり、安心させたりすることができる。白を黒といいくるめるともいう。そんなつもりでなくとも、ちょっとしたいい方で、与える感じがまるで逆になってくる。答案提出の五分前に入学試験の監督者が「あと、五分です」というのと、「まだ五分ありますよ」というのでは、受験生の心理にはだいぶ違いが出てこよう。

こんなことは常識だといえば常識だが、案外気がつかないものだ。こういった言葉づかいから、もう一歩も二歩も突込んで、あらゆる事実と可能性を引出し、それを一般的に方式化してみると、われわれの意思の交流には、言葉のつかい方というものが意外に重大な役割をもっていることがわかる。それが個人と個人との関係にひびくものならば、社会的な関係にも大変重要な結果を生んでこよう。その意味で、言葉のつかい方が、生活の内面に強く浸透してくることがわかる。

著者は、民主社会は正しいコミュニケーションを基礎としているという立場からこの研究に打込んでいる。理屈倒れではなく、豊富な実例と自分の体験を取入れて、それこそ読者との間でよいコミュニケーションをやろうというのが本書だ。これは雄弁術や話術の話ではない。むしろその反対のものを目ざしているのだが、この理論はいきおいテーブルスピーチや集団討議のやり方にまでおよび、興味深いばかりでなくふだんの生活に大いに役立つ。そうした人間関係をさぐるこの話し方の科学は、人生の行路に不可欠の道案内だということに気づくのである。

科学的話し方の指導書

金久保 通雄

この本の著者斎藤さんは、現代社会の新しい話し方は、雄弁術でも話術でもない。正しい話し方とはコミュニケーション（通じ合い）としてのことばの技術だから、新しい話し方を学ぼうとする人は、まず相手の話をきく態度を身につけなければいけないといっている。

新しい時代の新しい話し方は、特権階級の話し方から、民衆のためのあらゆる人々のための話し方に変わった。いたずらに、話し方の技術を身につけることが、新しい話し方を学ぶことではないと、斎藤さんは口をすっぱくして説いている。

「話術家の邪道」や雄弁術から、正しい話しことばを取り戻すことから、新しい話し方は始まる。だから斎藤さんは自分らしく話すことに誠意と情熱をかたむけ、真剣にからだと心を一つにして、自分全体で話すことが、コミュニケーションとしてのいちばん正しい話し方だといっている。だからといって、だれでも正しい話し方ができるわけではない。新しい話しことばを身につけるためには、時間と忍耐と努力が必要である。

この本は、日本でただ一人の「話し方」の学者である斎藤さんが、学問としての話し方の研究と、話し方の実践指導をされてきた豊かな経験をもとにして書かれた本で、日本ではじめて出た科学的な話し方の指導書である。ルーズベルト夫人の話し方が出たかと思うと、日本のＯＬや保険の勧誘員の話がでてくるといったように、話し方の生きた例がふんだんに使われていて、読んでいるうちにだれでも、これなら自分も正しい話しことばを身につけることができると勇気づけられる。日本における新しい話し方運動の指針でもある。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

新版のためのまえがき

斎藤 美津子

『話しことばの科学』が出版されたのは、ちょうど私が、カナダの大学で教えているときでした。朝日ジャーナルが書評を掲載したり、いまは亡き笠信太郎先生が、新聞の書評欄の四分の一くらいのスペースをさいて、激賞して下さったことがありました。その後十数回にわたって版を重ねてきました。このたび長年私の尊敬してきた田村勝夫編集長のご配慮で、筆を加え、新しい装いのもとに組み方も読みやすくするなど工夫した新版を出すことになりました。

「戦後、話し方の本は非常に数多く出ましたが、この本だけ残りましたね」と、NHK学校放送国語教室の担当の方々が感慨深そうな表情で話されただけあって、この本の需要は絶えまなく続いているようです。

『話しことばの科学』は、話し方の本ではありません。「話しことば」という題が、ことばづかいなどを取り扱った本のような印象を与えるおそれがあることを知りながら、なぜ「話し方の科学」にしないかと申しますと、「話し方」というと日本の社会では、話術、雄弁術のことをいうように思われ、したがって「話し方の科学」という題をつかうと、口先の上手な、お世辞のうまい人をつくる技術を教えるような印象を与えるからです。

演説ということばを考え出したのは福沢諭吉ですが、明治八年に東京の三田に演説館を建て、その普及につとめて以来の歴史的変遷をしらべてみますと、一般に「話し方」というと、「沈黙は金、雄弁は銀」という思想の浸透している文化的背景をもつ社会では、軽佻浮薄の代名詞のよ

うに思われても仕方がないと思います。『話しことばの科学』という題を、コミュニケーションの基礎理論とでも置き換えたいくらい、私はコミュニケーションの新しい概念、新しい理論の上に立って、この本を書いたつもりなのです。

私の言うコミュニケーションとは、従来からの話術、雄弁術とは、はっきり一線を画している新しい話し方で、言語行動の諸様式を研究し、人間一人一人のもつ無限の可能性を信じ、その発展につとめる行動科学の理論の上に立っている考え方に根ざしています。

私の持論ですが、コミュニケーションの終極の目的は、人間と人間の出会いをもたらすものでなくてはならないのです。すなわち、人間同士の心の触れ合いがもたらされなければなりません。コミュニケーションの場においては、ことばは、人間と人間を結ぶ連結ピンのようなもので、ことばを通して、私たちはおたがいを知ることができるのです。

したがって、ことばの選び方、ことばの使い方は、人間関係を結ぶために非常に重要なもので、敬語とか、女性のことばとか、礼儀正しいことばなどが研究されるのは当然のことなのです。しかし、コミュニケーションの分野では、ことばをこえた人間同士の魂の出会いを目的にしていますので、ことばは、言語行動の一部としての役割しか果たさないわけです。

生物学者のM・スワンソンが、人間の存続のために不可欠な物理的要素を四つあげました。空気、水、食物、コミュニケーションです。彼女はコミュニケーションという問題と深く取り組み、猿を用いて何度か実験を続けました。そしてコミュニケーションの不足している猿は、かならずその行動に変化が現われてくると説き、コミュニケーションをExchange of Human Warmth（人間のもつ温かさの伝え合い）と定義づけました。猿は、人間のように、記号（ことば）を用いた知

的コミュニケーションはしませんが、感情のレベルで、情動的なコミュニケーションをしています。猿が猿同士の温かさを感じ合えないような状態に隔離されると、しばらくして、奇妙なことをやり出します。行動の変化が出てくるわけです。

人間の場合は、コミュニケーションが不足すると、欲求不満の状態に陥るのですが、そのときは話のきき方という言語行動に、す早く変化が現われてきます。講演をしていると、コミュニケーションがうまくいっているときとそうでないときでは、おもしろいくらい、話のきき方の違いが目につきます。

コミュニケーションの分野においては、きき手が話し手と同等の重みをもっていますし、自己を表現する話し方は、きき方から始まるといわれています。コミュニケーションの五つの技術は、読む、書く、話す、きく、考える、だといわれますが、この中で、「きく」「考える」をことに強調するのが最近の傾向です。自己を表現するまえに、よくきき、よく考えることの訓練が、現在いちばん求められているようです。中学、高校の国語教育の中での話しことばの単元でも、きくこと、考えることにもっと重点を置くべきではないかと私は考えています。

というのは、コミュニケーションの分野は、話し手だけの一人舞台ではなく、ここでは話し手ときき手の共同作業が絶対不可欠なのです。最近の科学の進歩も一人の天才の知恵だけによるのではなく、多くの科学者たちの共同研究にまたなければなりませんが、これはコミュニケーションも同様で、人間尊重を基盤として、心の触れ合いをもたらすべく、おたがいに努力しなくてはならないと思います。

戦後二十数年、言論の自由を享受して以来、話し方ブームで、われもわれもと話し方教室へ通

い、自己の表現方法を学んだ人たちは、いまや、人の話のきき方を学ばなければならない時代に入っています。昔からいわれている「きき上手」とは、生まれつきではないのです。私たちは、誰でもしゃべれますが、話ができるのと、効果的なコミュニケーションができるのとは別問題です。コミュニケーションの五技術は訓練を必要とします。その訓練の基礎的理論を提供しようと努めたのが、この本の意図であります。

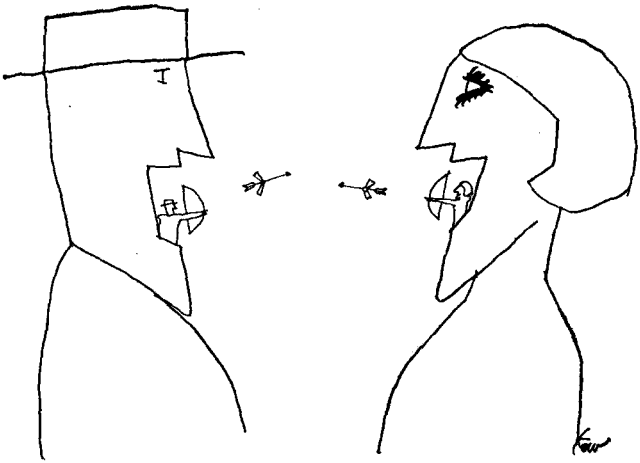
コミュニケーションはクリエーション（創造）であるといわれますが、効果的なコミュニケーションをしようとするならば、話し手も、きき手も、ともに雰囲気を明るい楽しいものに創り出します。そして、その場所にいる人間たちの人間関係も、楽しいものに創り、やがては自分の人柄をも明るい温かいものに育てていけるのです。

人間は、機械がもたない力をもっています。それは、人間同士が協力し合ってやると、二人の力は二ではなく、それ以上のものが出るということです。世の中でなんといってもいちばんすばらしいものは人間でしょう。無限の可能性を潜ませている人間一人一人です。自分をたいせつにし、自分を表現し、相手を理解し、心と心の触れ合う経験をもつことこそ、人生の生きがいを感じるときでしょう。この本が明るい家庭、明るい職場の創造に、なんらかの役に立つように祈っています。

つづいて、きき方の面からコミュニケーションの問題をとりあげた本を出すことを考えております。新版を出すにあたり、田村編集長のもと、生田栄子、諏訪部大太郎さんをはじめサイマル出版会の皆さんが骨身を惜しまない助力を与えて下さったことに深く感謝いたします。また私のよき母と家族の協力と理解にも、心から敬愛の念を捧げたいと思います。

（一九七一年二月）

話しことばの科学・目次



話しことばは両面交通　　カット／上山 工

人生行路に不可欠の道案内書　（笠　信太郎）
科学的話し方の指導書　（金久保通雄）
新版のためのまえがき

正しい話しことば（はじめに）……一
話術・雄弁術・話しことば／話しことばの両面交通

1　コミュニケーションとは何か……七
共同作業と通じ合い／「きくこと」のむずかしさ／上手な質問／ことばのキャッチボール／話は人なり

2　効果的な話し方……二七
人前であがらない処方箋／好感のもてる話し方／ことばづかいと声／声と人柄

3　聞き手の立場……四九
聽衆はかぼちゃか／聞き手の権利／聞き手の分析／説得されるとき／聞き手を動かすもの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

4 話の準備……七七
話の目的をきめる／準備の順序
5 話題……八九
よい話題／生きた材料をテーマに／素材は積極的に集める
6 話の組み立て……一〇五
効果的な組み立て法／アウトライン法／まえおきとむすび／話の設計図
7 話し方のいろいろ……一二五
日常会話／電話のかけ方うけ方／テーブルスピーチ／公式のあいさつ／面接／セールスマンの話術／ラジオとテレビ／ディスカッション／司会者の役割
8 ことばの科学……一七九
よい人間関係のために／ことばの魔術／ことばの七つ道具／話し合い／正確な伝達／注意の与え方

正しい話しことば
——はじめに

とつ弁の人のほうが「人間相手の商売」の結果がよいのです。せんじつめると、人間関係を結ぶ話しことばというものは、雄弁術とか話術とかには、あまり関係がないといえそうです。

話しことばとはなにか。「話し方」ブームのこのごろでは、多くの人々が「正しい話しことば」を習得したがっています。私どもは立派な国語、そして世界に誇る文学をもっているのに、いまさらなぜ改まって「正しい話しことば」を学ぶ必要があるのでしょうか。

話術とか雄弁術とかは、exhibition——つまり人々に展示してみせるものです。現代の言語生活においては、みせもの的な話し方はタレント型のものとして、ごく少数の人々のために存在するもので、私ども一般の人々に必要なものではありません。

十九世紀の終わりごろ、アメリカのハーバード大学などでは、「話し方」が学位をとるための必修課目になっていました。ところが、二十世紀に

話術・雄弁術・話しことば

郵政省で、簡易保険の勧誘員の成績優秀なものを三人ほど表彰したときに、その三人はみなとつ弁で、そのなかの二人はまるでどもりに近いほどだったという話をきいたことがあります。

いったいこれはどういうことなのでしょうか。

保険の勧誘員の仕事は、ちょっと考えると雄弁家が成績をあげるようですが、結果はその反対。

なると、すっかりすたれてしまって、影も形もなくなってしまいました。その時代の歴史を読んでみますと、人々の考え方が民主的になっていくにつれて、いままでの「みせもの的な話し方」exhibitionが社会のなかから姿を消していったのです。つまり、人々に受け入れられなくなった、ということです。

いままでの「みせもの的な話し方」――話術や雄弁術は、美辞麗句をつかい、ジェスチャーを派手にし、人を煙にまくくふうをしたり、ときにはハッタリをきかせたり、詭弁を弄したりする、つまり話し手と聞き手との「心と心のふれ合い」などということよりも、むしろショーマンシップ的な方向に片寄っていたのです。しかし、民主主義の精神が人々の間にひろまっていくにつれて、このような話し方はしだいに重要視されなくなってきました。

大正九年（一九二〇年）十二月十九日に、アメリカのシカゴではじめて「正しい話しことばをひろめる運動」という会が結成されました。おもに学校の国語の先生が中心になって、社会科その他有志の先生方が四、五十人集まったということです。そのときのようすをC・T・サイモン博士（言語矯正専門の心理学者）が感慨深そうに話されたのをおぼえています。

「シカゴで第一回の集まりが開かれたのは、民主社会に必要な新しい話し方をひろめる運動が、中西部から起こったことを証明している。民主社会では、話し上手、口上手のいわゆるタレント型の話し方とは別に、みんなの話し方（Speech for everyone）が必要になってくる。どもりの人も、一人の人間としては立派な存在である。いままで人からはずかしめを受けてきた言語障害者たちにとっても、民主社会で生きていくために必要なのは、話術ではない、雄弁術でもない、新しい話し方である」と。

人間をひろく平等に愛する立場に立って、特権階級の人々だけの話し方から、民衆のための、あ

らゆる人々のための話し方に大きく変わっていったのです。そして教育にたずさわるものが「民主教育では新しい話しことばを教えなければならない」と団結し、前進をはじめたのです。

ちょうどこのころ一般の人々のなかからも、話し方を学びたいという日本の話し方ブームと同じようなものが起こり、話術の大家デール・カーネギー氏などは、その波に乗って巨万の富をつくりました。しかしアメリカの「正しい話しことばをひろめる運動」は、小学校、中学校、高校、大学の先生たちが協力して、「話術家の邪道」（と呼んでいました）ではなく、新しい話しことば、すなわちコミュニケーションの勉強として、はっきりとした方針を打ち出し、学校教育のなかからはじめていったのです。アメリカでは、ここできっぱりとした革命的な切り換え線がひかれたわけです。

日本における最近の「話し方ブーム」は、当時のアメリカにも劣らず、大衆の間から起こっていますが、新しい話しことばとしては、まだ革命的な切り換えの線がはっきり引かれていないようです。

国語学者の西尾先生のお話によりますと、日本語の「話し方」ということばは、どうしても私どもに話術的、雄弁術的な意味を与える感がある。むしろ、「話しことば」ということばのほうが、新鮮な感じで適切であろうということです。

それならば新しい話しことば――コミュニケーションとはどういうものなのでしょうか。

話しことばの両面交通

一方交通の道路は、一方からだけ車が入れて、反対側からは入れない。つまり閉鎖されているのです。話しことばの場合にも、こんなことはないでしょうか。家庭での話し合い、職場での対話、みなさんの話し方は一方交通ではないでしょうか。

私たちのまわりには、いままでの習慣で一方交通的会話をしている人々が、いかに多いことでし

ょうか。いつでも上から下へ、上→下という形式をとっているのです。たとえば、大学の先生が講義をするとき、自分のノートをみたり、窓の外をみたり、きいている学生の反応などにはいっこう無頓着で、時間がくればさっさと退場する。学生がわかったかどうかなどということは、おかまいなし。学生が退屈して居眠りしても、また声がききにくくて困っていても、平気の平左衛門。自分のいいたいことだけを勝手にしゃべる。これは常套手段の一方交通です。

私たちは、学会や自称文化人の講演会などで、「聞き手無視」の一方交通に会うことがしばしばあります。自分の主張が相手にどんな反応を起こさせるか、全然考慮に入れないこと、これが話しことばの一方交通です。相手のほうから自分のほうにくる道は開かれていません。

このような話しことばの流れのなかに、私たちは毎日生活しているのです。お腹をすかして帰ってきたご主人。「おい、まだご飯できないのか、いったい何時だと思ってるんだ、早くしろ」。これをきいた台所の奥さん。「あたしが朝から晩まで、こんなに一生懸命働いているのに、ちょっとご飯が遅れたからといって……。あたしはあなたの女中じゃありませんよ。一日中遊んでいると思っているんでしょ」

ご主人からの一方交通の道、それに平行して、奥さんのほうからの一方交通の道が反対側にできてしまいました。この平行線は、二つの別の道路であって、両面交通になる可能性はありません。けんかになるのが関の山です。家庭だけではなく、職場でも、学校でも、上から下への形式か、さもなければ、このような平行線の形式が多いようです。話し合い決裂などという場合は、まさにこの平行線の状態で、一方交通はいくらくりかえしても、時間をつかっても、両面交通にはなりっこないのです。

話しことばの一方交通は、一方的に相手を封鎖してしまいます。これは悲劇に終わるだけで、決

してよい人間関係はつくれるものではありません。

人間関係をよくするための話しことばは、両面交通であることを原則とします。行って帰ってくるやまびこのような形のもの。聞き手に理解してもらいながら、自分のいいたいことを語っていく、平行線ではなく円形のようなものです。相手を考慮に入れない一方交通ではありません。聞き手の大部分がつまらなくて、またわからなくて、眠ってしまっても、平気で講演をつづける学者や文化人たち——これも両面交通を知らない人たちです。

話しことばの両面交通を実施している講師の話は、大へんおもしろく、眠気を催すことなどはないものです。一対一の場合も、両面交通の通じ合い、わかり合いができれば、その人間関係は話しことばを通して、ますますよい方向にむいていきます。心と心の結びつき、理解のうえに立った人間関係をつくるもの、これが両面交通、つまりコミュニケーションであり、新しい話しことばというものです。

たえず相手の反応を確かめながら、相手に呼吸を合わせて行なう feedback（おくりもどし）が、両面交通の道を可能にするもので、自分勝手に、独善的でしかも封鎖的な、一方的な話し方をする人々は、この feedback をしない人々です。ただ一生懸命に、誠実に聞き手にぶつかること、自分のありのままの姿で相手に呼吸を合わせ、理解してもらうような方向に進めていくことば、限られた少数のタレント型人物が口上手にしゃべることばでない、私たち一般民衆のための話しことば、これこそが正しい話しことばなのです。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook